
魔法の雪

まりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の雪

【Nコード】

N8817Z

【作者名】

まりあ

【あらすじ】

某巨大掲示板に落とした小説の後日談です。

ライダー大戦から一年が経ち、海東はネガの世界に来ていた。

あの頃、世界を支配していたダークライダーは倒されていなくなつてはいたが、そのかわりに……

と、言うストーリーを書いている途中で、その数年後のクリスマスネタが浮かびました（笑）

でも、時期がおもいきりズレてしまってお恥ずかしい……

今日は12月24日。クリスマスイブ。

街中がイルミネーションで華やかに煌めき、恋人同士や子供達が浮足立ちお祭りムードになる日。

そんな日が、ここネガの世界にもやってくる。

だが、あれから三年経って安定してきたとは言っても、まだまだ慎ましい生活をしている彼等には関係ない。

そう、思われたが……

「カンパニー!!」

ここはこの世界の光写真館。海東とナツミが二人で暮らしているこの家に、明るい声とカチン、とグラスが当たる音が響く。

テーブルの上には、みんなで寄せ集めた食材で作った料理。そして、海東の世界から援護として来た禍木慎が持ってきたシャンパンとジュース。そして、あの倉庫で暮らしていた娘達。写真館のスタジオには少し人数が多いし、決して豪華ではない。だが、毎年クリスマスイブはこうして以前暮らしていた皆で集まり、ささやかなパーティーをしていた。

「さて……そろそろ出そうかな……?」

皆が料理を食べて落ち着いた頃、そう海東が呟いてキッチンに向かう。そして、スタジオに戻ってきた時歓声が上がった。

「すごい!!クリスマスケーキだ!!!!」

「嘘っ!!もしかしてあんたの手作り?」

「ああ、簡単なやつで申し訳ないけどね……」

海東はいろんな世界を行き来できる。勿論、他の世界に行けばそれなりのモノは大抵手に入る。と言っても、ここで生きていくと決めたし、ナツミと二人で皆と同じ生活をするとも決めた。だから、

他の世界には極力出向かないようにしている。このケーキだって、海東が今ある材料でなんとか作ったものだ。

「やったあ！ケーキなんて久しぶり！」

「……あまり期待はしないでくれ」

子供のように喜んでる優にそう言いながら、ケーキにナイフを入れる。

この家にはオープンなんて物はない。生地はフライパンで焼いたし、苺が乗ってるだけで派手な飾り付けもない。

「いつかちゃんとしたのを作れると良いんだけど……」

料理の腕に自信のある海東にとっては納得できない出来だったよ
うで少し不満げである。

それでも、数年不憫な生活を続けていた彼女達にとって心踊らせるには十分過ぎるほどのものだった。

「おいしーい！」

まず、エリが満面の笑みでケーキを食べる。他の娘も絶賛していた。

「海東、あんた相変わらず良い奥さんやってるね」

そんな中、パクパクとケーキを頬張りながら、優が機嫌よさ気に声をかける。顔が少し赤いから、慎が持ってきたシャンパンを飲んで酔っているようだ。

「君の言ってる事の意味がわからないんだけど？」

「だって、あんたがナツミのお世話してるんでしょ？で、炊事洗濯が上手くて実は可愛い顔してるなんて奥さん以外の何物でもないでしょうが」

「優……酔ってるだろう？」

「酔ってませーん！全然素面だしー！それに私、あんたより可愛いしー！ー！」

「……間違いなく酔ってるだろう？」

「よってないっつーの！」

「あー、そうだね。酔ってないよ」

これ以上酔っ払いを相手に出来ないと、適当に返事をして部屋を見渡した。だが、目当ての人物が見当たらず、眉を寄せた。

「あれ……？」

「あー……ナツミなら外に行ったよー」

「外に……？」

「うん。だーれも邪魔しないから行ってきなー」

早く行ってこい、と、手で払う仕種を見せる優に、「ケーキ、ナツミの分を残しておきたまえ」と残して外に出た。

ネガの世界での夜は、相変わらずシインと静まり返る。それは、ダークライダーに脅かされたうえ、人間の男からも裏切られた過去はなかなか拭えないと、そういう意味で。こんな瞬間を感じると、あれら三年経って大分住みやすくなっただけと思うが、まだだやることは一杯あるのだと、そう思わざるを得えない。

「……寒いな……」

小さく呟いただけで白い息が出る。ジャケットを羽織っているのに冷たい空気が肌を刺した。

こんなに冷えるなら、もしかしたら今夜は雪が降るかもしれない。キンと空気が冷える中、空を見上げた。

「ナツミはどこかな……？」

こんな寒い中に立っていたらすぐに冷えてしまう。それに、こんな夜に女性が一人でいるなんて危ない事に変わりはない。

少し歩いていると、ナツミは玄関を出た先の路地に一人立っていた。

街灯に照らされたナツミは、可愛いトップスに厚めのカーデイガンを羽織り、白いホットパンツにカラータイを穿いている。

夏海から貰った服を着て一人佇む姿を見て、本当に夏メロンと瓜二つだな……と、思った。

でも一度だけ、ナツミと別れたあの時だけ、彼女と夏海を見間違

えたけれど、もうそんなことなんて有り得ない。

「ナツミ」

「あ……大樹」

「何してるんだい？一人で外に出るなんて危ないじゃないか」

「平気。キバーラがいるから」

険しい表情の海東に微笑んと言うと、キバーラがナツミの影からヒョイと現れて、彼女の回りをヒラヒラと飛び海東の前までやって来る。

「そうよお、大樹さ〜ん。私がいるんだから大丈夫よ〜」

いざという時は変身させちゃうから。と、ウィンクをしてふらふらと目の前を飛んでいる。海東の世界から来た慎が持ってきたシャパンを少し飲んだらしく、かなり良い感じになっているようだ。

「キバーラも酔ってるみたいだね」

「失礼ねえ、酔ってないわよお」

優と同じ反応を見せるキバーラは、海東とナツミが土達の世界に行った時に理由はわからないがナツミの事をいたく気に入ったようで、今ではよくこうやって遊びに来るようになっていた。

だけど、夏海はともかくナツミを変身させる気なんてさらさらない。

「キバーラ、ナツミを守ってくれてありがとう。僕がいるから、もうボディーガードは必要ないよ。早く土達の所に帰りたいまえ」

「あらあ、つれないわね？邪魔物は早く退散しろってことカシラ〜？」

「お察しがいいね。わかっているなら僕達の邪魔はしないでもらおうか」

余裕の笑みさえ浮かべてそう言う海東に、違う反応を期待していたらしいキバーラは小さな唇を尖らせた。

「あーあ、もう。あんたつてからかい甲斐がなくてつまんなーい」

「土と一緒にしないでくれたまえ。本当の事なんだから隠したりムキになる必要もないだろう？」

「やーねえ、恥ずかしげもない男は。良いわ、土くんをからかってくるから。じゃあね、ナツミちゃん」

気まぐれな銀色の小さい蝙蝠は、パタパタと翼をはためかせて歪んだ空間の向こう側に消えて行った。

「で、こんなとこで何をしてたんだい？キバーラがいてくれたから危なくないにしても、今日は凄く冷えるよ。ほら、手も凄く冷たくなってるじゃないか」

寒気に晒されたままの手を握ると、外にいたのは少しの間だけだった。その手は酷く冷えきっていて。海東は色味を無くしている細い指に、はあ……と、息を吹き掛けた。

「あ……うん……あのね。雪が降るのを待ってたの」

「雪が……？」

「うん」

ナツミはこくと頷いて、空を見上げる。

「私が小さい頃、おじいちゃんが教えてくれたの。イブの日に振った雪は魔法の雪だって」

「魔法の雪……？」

「そう。イブに降る雪は魔法が込められてて、その雪に願い事をすると必ず叶うって、そう教えてくれたの」

「へえ……」

そんな話は聞いたことがない。そんな海東の思いを察したのか、ナツミは少しはにかむように笑った。

「多分……絵本なんかの話だったと思うんだけど、そこまでは覚えてないの。でも、その話を聞いてなんでも叶うなんてすごいってドキドキしたのは覚えてる」

そつと、手を離して二、三步踏み出すナツミ。

「でも……いろいろあつて忘れてて……今日ね、ふと思い出したの」
海東に背中を向けたまま、空を仰ぐ。

「私、小さい頃に両親を亡くして……一度でも良いから逢いたくて、イブの夜にお父さんとお母さんに逢わせてってお願いしたくて

ずっと待つてたの……でも、どれだけ待つても雪は降らなくて……私、おじいちゃんに泣きながら文句を言つてた」

海東はただ、その背中をじっと見つめていた。

ナツミはきつと、家族の事を思い出している。

そう、思つた。

「おじいちゃん、凄く困つてた……そんなの、作り話なのに信じてたの。馬鹿みたい……」って笑つちゃうでしょ？」

「いや、そんなことないよ」

振り返り、そう言うナツミに首を振る。それに応えるように微笑んでまた空を見上げた。

「それを思い出したら……作り話だって分かつてるんだけど、また願い事がしたくなって……こんなに寒いなら、もしかしたら……つて……」

だから、こんな寒いで雪が降るのを待つていたのだ。そこまでして、どんな願いを叶えたかったのか……

一つだけ思い当たる事が浮かび、胸の奥がズキンと痛む。その痛みを打ち消すかのように、ナツミを背中から抱きしめていた。

「大樹……？」

「願い事は……」

いきなり抱きしめられて身じろぐナツミに、まるで問い掛けるように口を開く。

「家族に……逢いたい……？」

「……………」

酷いことを聞いてしまった。

幼い頃に両親を無くし、ずっと育ててくれた祖父もダークライダ―に殺された。そんな彼女が家族に逢いたくないわけがない。優しい温もりで包まれない筈だ。

家族を失い、そのうえ身体と心を傷付けられて、きつとナツミの心には大きな穴が開いている。その穴を埋めてあげたい。

けど、無理だ。自分ではナツミを育ててくれた家族の代わりには

なれない。悲しいけれど、家族の温もりをナツミに与えることは出来ないのだ。

だけど、ナツミは小さく首を横に振った。

「うん……今は、大樹がいるから……」

「……っ！」

「大樹が……いっぱい愛してくれてるから平気……」

きゅっ……と、自分の腕を握り締める手に愛しさが込み上がる。何よりも大事である筈の家族よりも、こんな自分を選んでくれた。それが、不謹慎だが凄く嬉しかった。

「私が叶えて欲しいのは違うお願いなの……」

「そう……」

ナツミがどんな願いを叶えたかったのか。それは気になったが、今はこの大事なお宝を包んでいたい。そのまま、ナツミを優しく抱いていると。

ふわり……

そっと、白い結晶が舞い降りた。

「えっ………？」

続けて、雪がはらはらと降って来る。ナツミは海東の腕を解き、嬉しそうに手を広げて空を仰いだ。

「大樹。ほら、雪」

「うん、良かったね」

「うん」

ナツミは花のように微笑んで、掌で雪の結晶を受ける。小さく美しい結晶を優しく包んだその手に、そっと自分の手を重ねた。

「大樹……？」

「僕も、一緒に……良いかな？」

「うん」

少し、不思議な顔をしていたナツミはコクンと頷く。そして、二人目を閉じた。

叶えて欲しい願い事はたった一つ。

愛しい君と、いつまでも一緒に。

君と共に生きたい。この世界にしかない、どこに行っても手に入らない、たった一つの大事なお宝だから。何者にも傷付けられないように、僕が守りたい。

この命が消える時までずっと。

そう、願いを込めて瞳を開いた。

「何をお願いしたんだい？」

「秘密。言ったら願い事が叶わなくなっちゃうの」

「それは……困るね」

「でしょ」

二人でクス……と、微笑んで、引き寄せ合うように静かに唇を重ねた。

「ホラ、やっぱり。冷たくなってる……」

そっと、唇を離して親指で冷たい唇に触れる。

「あんまり冷やしたら身体に悪いよ。皆が帰ったら、暖めてあげる」

僕が、ね……と、細い身体を抱き寄せて耳元で囁くと、頬を染めて肩口に顔を寄せた。

「……うん……」

だけど、恥ずかしがりながらも頷く姿に内心安堵して、額に口づけるとナツミは幸せそうに微笑んだ。それだけで、胸が熱くなる。

どうしようもないほどに、ナツミの笑顔が愛おしい。ナツミと出逢ってからもう三年。随分とこの世界も変わったけれど、この想いだけは変わらず続いている。

この気持ちも、誰にも渡せない大事なお宝だ。

こんなに誰かを愛することなんて、多分もうないだろう。

もし、あるとするならそれはきっと

「あーーーーーっ!!」

見つめ合う二人を引き裂くように、少女の叫び声が響き渡る。二人が声のしたほうを見ると、エリが真つ赤な顔で指を差していた。

「おにーちゃんとナツミちゃんがそとでいちゃいちゃしてるー！ー！……！ナツミちゃんずーいー！……！！！！！」

「ちよつと、もう！エリ！やめなつて！！空気読みなつてば！！」

「やーら！！はなしてよう！」

続けて優がやって来てエリの手を引いたが、それを振り払い二人の前に歩み寄る。エリは顔全体を赤くして、据わった目で二人を見ている。明かに酔っ払いだ。

「なあに、エリ。もしかして、お酒飲んじやつたの？」

「のんれないもん！いつもとかわんないし！！」

「エリ、駄目じゃないか。お酒なんか飲んだら」

「らーかーら、のんれないもん！！」

海東とナツミ。二人から注意され、ぷうつと頬を膨らますエリ。

「ごめん、ちよつと目を離したらジュースと勘違いして飲んでて……」

そのせいで、すっかり酔いがさめてしまった優が申し訳なさそうに言う。しかし、エリはそれすら気にならないようで、その様子に二人で溜息をついた。

「なによ、いつも二人でいちゃいちゃしてー！！ろーせこのあとさ、おにーちゃんが「あたたためてあげるよvv」とかいつて、えっちするんらー！！！」

頬を膨らませたエリの言葉に、海東は思わず咳込み、ナツミは耳まで赤くなる。その反応を見て優はブツと噴き出した。

「ほら、ずばしれしょ？ふーんだ！リアじゅうばくはつしるー！！」

「エ……エリ！！どこでそんな言葉を覚えたんだ！！」

「慎にーちゃんが、おにーちゃんとナツミちゃんがいちゃいちゃし

てたと言えつておしえてくれたもん」

「憤か……！」

以前、自分の世界では敵視していたが今では同志でありハルカと結ばれた男に余計なことを……と、内心舌打ちして恨めしげに優を見つめた。

「まったく、優の監督不行き届きだよ」

「何で私のせいになってるのさ！ハルカの旦那が悪いんでしょ！てか、それどういう意味なのさ」

「意味なんか知らなくても良いよ。とにかく、あまりエリを憤に近付けないでくれないか」

「だいたいね、エリにさえ突っ込まれるようなベタなことやってるあんたが悪いんでしょ？」

「黙りたまえ。もう良いから、中に入るんだ。風邪引くよ」

「はいはい。ほらエリ、行くよ？」

「ええ……？」

「良いから。あの二人も来るから、もう中に入るよ！」

やらー！とか、ずーるーいー！とか、他にも騒ぎ立てているエリの背中を優が強引に押していく。

「僕達も行こうか、ナツミ。本当に風邪引くよ」

「うん」

手を差し出すと、ナツミがしっかりと手を取る。こんな冷たい夜でも手を繋ぐと凄く暖かい。

こんな、なんでもない瞬間が愛しい。海東は、二人が先に家に入つたのを確認してからナツミを引き寄せて軽く口付けた。

「だ、いきつ！」

「願い事、叶うといいね」

不意をつかれて思わず焦るナツミのニットを外し頭をくしゃくしゃと撫でて、再び細い手を引いていく。

ドアの音が、静かな聖夜に溶けていった。

この二人に、小さな小さなクリスマスプレゼントが届いていたのがわかるのは、この二ヶ月後。

それは、ナツミの願い事が叶った瞬間。

「私達に新しい家族を……赤ちゃんをください……」

H a p p y M e r r y C h r i s t m a s ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8817z/>

魔法の雪

2011年12月27日19時49分発行